

塩津小学校から見た白い船(映画「白い船」より)



プロローグ

錦織監督

映画の現場から



●●1

全国キャンペーンに出掛けてい
ると、島根で多く映画を撮るのは
なぜですか?とよく尋ねられる。

それは故郷だからというだけでな
く、映画「白い船」をきっかけに
故郷への「既成概念」がガラガラ
と音をたてて崩れたからである。
以来今日まで故郷を誇りに思う気
持ちは募るばかりとなった。コラ
ム「映画の現場から」では、島根

の魅力はもちろん、映画作りから
みた現在などをつつてみる。

※ ※ ※

映画は、言葉や文字だけでは伝
えることのできないメッセージを
発信することも仕事の一つである
と思う。映画監督もまた、ただ映
画を作ればいいのではなく、人々
がなかなか気づくことのない角度
からものをみて企画発想するもの

故郷の「既成概念」崩れる

だと思っている。諸先輩からもそ
う教えられてきた。

海外ではメッセージを伝える位
置に映画があると思うが、果たし
て日本の映画がそれだけの仕事を
しているのか、と考えることがある。
映画には人々に潤いや勇気、
時には笑いなどの娯楽を与えたり
できる大きな役割を担っている。
年に400本以上の邦画が生まれ
ているが、私たちは映画館に行き
たくなる映画が作られていない、
という声なき声にも耳を傾け、映
画を作る立場として猛省しないと
いけないと思う。

私自身、映画「白い船」をきっ
かけに映画監督として大きく価値
観を変えることになった。大げさ
でなく故郷の皆さんのおかげであ
る。今年20周年を迎えるしまね映
画祭の存在も大きかった。

雲州ふらた映画祭をはじめ島根
全県に広がる映画祭事務局のスタ
ッフや映画上映に関わった多くの
人々との出会いがきっかけで、故
郷をあらためて見直すことができ
たと感謝している。映画作りと上
映をきっかけに出雲や石見、隠岐
はもちろんのこと、山陰各地で多
くの「人々」と出会った。この

「人々」が実にいい。もちろん自
然や文化、古くからの伝統や遺跡
なども魅力的だが、「そこに生き
る人々」の魅力こそが故郷の財
産なんだなあと気づいた。

高校生の頃、嫌だまらなかつ
た田舎が今は誇らしく見えてい
る。それだけではない。見方を変
えれば世界の中でもわが古里ほど
古くて新しいところはない、と本
気で思っている。そんな価値観の
変化をはじめ、島根での映画作り
をきっかけとして気づいたことな
どをつれづれに書いてみたい。こ
縁に感謝しながら…。

※ ※ ※

「白い船」など故郷を舞台とし
た映画を撮ってきた出雲市(旧平
田市)出身の映画監督、錦織長成
さん。錦織監督が、映画制作を通
じて感じてきたわが国の映画文化
や故郷への思いなどをつづるコラ
ム「錦織監督 映画の現場から」
がスタートする。

＝毎月第2、4金曜日に掲載＝

にしこおり・よしなり 映画監督・脚本家。

1962年出雲市(旧平田市)生まれ。96年
「BUGS」で映画監督デビュー。2002
年「白い船」、08年「うん、何?」、10年
「RAILWAYS」と故郷の島根県を舞台
にした作品を発表。オリジナルの企画、脚本
にこだわる数少ない映画監督の一人。今年3
月から新作「わさお」が公開中。しまね映画
塾塾長を務める。